

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

## 1. 研究課題

現代 / 世界とは何か? — 人文学の視点から

## 2. 研究代表者氏名

山室信一・小関隆

YAMAMURO Shinichi, KOSEKI Takashi

## 3. 研究期間

2015年4月 - 2018年3月 (2年度目)

## 4. 研究目的

本研究班は「第一次世界大戦の総合的研究」(2007~2015年)の成果を引き継ぎ、それをより大きな現代史 / 20世紀史の文脈で検討することを目的とする。「一体化した現代世界」をつくりだした「現代の起点」たる第一次大戦によって惹起された諸問題のあるものは克服され、あるものは100年後の今日まで残存し、またあるものはその相貌を変えた。本研究班が検討の俎上に載せる具体的なテーマとして想定されるのは、デモクラシーの変容、グローバリズムとローカリズム / ナショナリズムの相克、パラミタリ暴力とテロリズムの台頭、プロパガンダと大量消費社会のかかわり、テクノロジーの暴走、モダニズムの命運、等である。「近代」と「現代」の連続性と非連続性、あるいは両者の地域的な相違も重要なテーマとなりうる。また、「人文学の視点から」というサブタイトルが含意するのは、第一次大戦によって「ヨーロッパ諸学の危機」(フッサール)がもたらされた状況を受け、今日の人文学は現代 / 世界に対して何をいいうるのか、という存在論的な問いである。

## 5. 本年度の研究実施状況

2016年4月以降、2017年1月26日までに例会を11回開催した(2017年2月までにさらに2回の例会が予定されている)。そのうち2回は、人文研アカデミーの一環として公開合評会の形態をとり、いずれも約50人の聴衆を得た。前年度の場合と同じく、「環世界の人文学」班とのジョイント開催とされた例会(2016年4月23日、さらに2017年1月27日予定のもの)もあり、多くの分野にまたがる学際的な議論が実現された。また、11月4~5日には、日本、韓国、中国、台湾から研究者を招聘し、国際研究フォーラム「東アジアにおける歴史認識と歴史教育:人文社会科学の課題と可能性」を主催した。この企画は2015年度に共催した国際カンファレンス「歴史と記憶の政治とその紛争」を引き継ぐ性格のものであり、共同班長の山室が基調

報告者を、小関がコメンテーターを務めた。報告者の内訳は、日本3人、韓国3人、中国2人、台湾2人であった。2017年度は最終年度であり、成果のとりまとめ作業が主たる課題となる。

## 7. 本年度の研究実施内容

2016-04-23

対象のモノ化、モノの対象化―「媒介」される生の運命

発表者 立木康介

2016-05-13

モデルネをめぐる言説―ボードレールあるいはベンヤミン

発表者 藤井俊之

2016-05-28

平野千果子『アフリカを活用する』合評会(評者:小川了、小野容照)

発表者 平野千果子 武蔵大学

発表者 小川了

発表者 小野容照

2016-06-10

「現代」のおわり、現在のはじまり ―歴史のなかの 1970 年代アメリカ―

発表者 中野耕太郎 大阪大学

2016-06-25

ローマ帝国解釈と近現代の世界

発表者 南川高志 京都大学

2016-07-08

石油とコスミズム:ロシアという現代/世界

発表者 伊藤順二

2016-07-23

荒木映子『ナイチンゲールの末裔たち』合評会アカデミー(評者:井野瀬久美恵、小関隆)

発表者 荒木映子

発表者 井野瀬久美恵 甲南大学

発表者 小関隆

2016-10-07

朝鮮半島の「現代」と大韓民国臨時政府

発表者 小野容照

2016-10-22

「1937年——美術・社会・政治」

1937年パリ万博をめぐるフランスの文化政策

発表者 大久保恭子 京都橘大学

1937年における第三帝国の展示・文化政策—パリ万博ドイツ館 / 退廃芸術展 / 大ドイツ芸術展

発表者 河本真理 日本女子大学

昭和前期の日本と美術——1937年パリ万博参加をめぐる

発表者 高階絵里加

2016-11-04

東アジア歴史研究フォーラム「東アジアにおける歴史認識と歴史教育」

2016-11-05

東アジア歴史研究フォーラム「東アジアにおける歴史認識と歴史教育」

2016-12-09

「新しい時代」以後の世界

発表者 三輪眞弘

2017-01-14

過去が紛争化させられる時代

発表者 橋本伸也 関西学院大学

2017-01-27

ボロとクズの人文学

発表者 藤原辰史

2017-02-10

人文学・期待の地平—環地方学と思詞学そして空間学へ—

発表者 山室信一

8. 共同研究会に関連した公表実績

東アジア歴史研究フォーラム「東アジアにおける歴史認識と歴史教育」(2016年11月4日～5日、京都大学人文科学研究所)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	21 (6)	1 (1)	0	2 (1)	167 (51)	13 (13)	0	17 (8)
学内	4	5 (1)	0	0	0	15 (1)	0	0	0
国立大学	13	24 (4)	0	1 (0)	0	75 (28)	0	5 (0)	0
公立大学	12	1 (0)	0	0	0	0	0	0	0
私立大学	22	32 (11)	0	0	0	89 (38)	0	0	0
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	5 (2)	0	0	0	42 (9)	0	0	0
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	4	4 (2)	2	1 (1)	0	21 (11)	3	5 (5)	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	57	92 (26)	3 (1)	2 (1)	2 (1)	409 (138)	16 (13)	10 (5)	17 (8)

※( )内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	平成 28 年度に共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研教員等のみの論文(単著・共著)	23		4	
②人文研教員等と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	31		1	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

人文研教員等には教員のほか、人文研の非常勤職員・指導している大学院生も含まれます。  
( )内は、人文研教員等が、特に重要な役割・高い貢献(ファーストオーサー、コレスポンディングオーサー、ラストオーサー等)を果たしている論文(内数)

高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
English Historical Review, vol.131, no.549 (April 2016), pp.353-383.	1	'To Vote or not to Vote': Charity Voting and the Other Side of Subscriber Democracy in Victorian England'	<u>Shusaku Kanazawa</u>

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

13. 次年度の研究実施計画

2017 年度の本研究班のスケジュールは確定しており、前期にはこれまでと同様に月2回のペースで例会を開催する。例会には「生と創造の探求:環世界の人文科学」班とのジョイント開催のものも含まれる。後期の主要な課題は研究成果のとりまとめとし、2015 年度や 2016 年度のよ

うなシンポジウムや公開合評会を行わない。研究成果の論集の構想に関する検討は既に開始されており、研究班の終了後できるだけ早いタイミングで出版を実現すべく、検討会を重ねる予定である。

#### 15. 研究成果公表計画および今後の展開等

2015年に発足した本研究班は2017年度で最終年度となる。中間的な研究成果の公開は2015年11月28～29日の国際カンファレンスや2016年11月4～5日の国際フォーラムで行ってきたが、最終的には論集としてとりまとめることを予定している。論集の構想に関する話し合いは既に始まっており、特に2017年度後期に集中的に進めるつもりである。